

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520064

研究課題名(和文) 社会的宗教と他界的宗教の統合的研究のための理論構築

研究課題名(英文) Theory Construction for the Integral Study of Social Religion and Otherworldly Religion

研究代表者

津城 寛文(TSUSHIRO, Hirofumi)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30212054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)： 宗教現象が他の文化現象と最も異なっているのは、社会的次元と他界的次元が深刻な対照をなすことである。その丸ごとの理解に近づくためには、社会と他界という2つの次元に、それぞれに適合する方法で、偏りなくアプローチする必要がある。実際の宗教研究は、研究者の関心や能力の偏りから、個々のアプローチは偏らざるを得ない。しかし別の次元があり、異なったアプローチがあることを、常に念頭に置くことで、その偏りは是正される。

本研究課題は、そのような偏りを是正するための、理論的な枠組みを作ることを目的として、「社会的宗教」と「他界的宗教」、「公共性」と「スピリチュアリティ」を対比させた上で、細部を精緻化した。

研究成果の概要(英文)： The most conspicuous factor in religious phenomenon from other cultural phenomenon is that there is serious contrast between social and otherworldly dimensions. It is necessary to approach two dimensions impartially by adequate method in order to close fuller understanding of religion. Most studies must be partial because of respective biased concerns and restricted abilities. Those biases, however, may be adjusted by considering other dimensions and different approaches.

My assignment aimed to construct and elaborate the theory for adjusting various biases by contrasting social religion and otherworldly religion, public-ness and spirituality.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、宗教学

キーワード：公共性 スピリチュアリティ 社会的宗教 他界的宗教

1. 研究開始当初の背景

宗教研究も、ほかの諸学と同様さまざまな下位分野に分かれ、各テーマが設定されて、それぞれの研究が行なわれている。言うまでもなく、それぞれの分野区分は作業の効率のため、あるいは能力の限界のため、またその時々流行もあり、便宜的に囲い込まれたものだが、学会においても、他の関心や方法を黙殺したり、否定したりという、大小のハラズメントがしばしば起こっている。公正で開かれた研究・教育環境を確保するには、妥当な対象、方法、主題は多数あることを、自他に再確認してもらう必要があると思われた。

宗教研究には、下位分野として、宗教史(世界全体、あるいは個々の)、宗教社会学、宗教心理学、宗教哲学、宗教現象学、などがあり、それぞれ自律的な作業が可能である。分野横断的な作業もあるが、個々の分野を全体の中に位置付ける作業は、学説史や概論レベルでしか行なわれていない。各分野は、研究領域と方法その他に関して、「棲み分け」をしている状況である。

2. 研究の目的

宗教研究で、下位分野の棲み分けが公正でない場合、優勢な領域や方法、組織的、人的な抑圧が起こる。とくに、宗教を社会現象ととらえる立場と、宗教を内面的営みととらえる立場が、際立った違いを見せており、かつ、両者は非対称な力関係にある。具体的には、社会的アプローチが、人的勢力として強すぎる状況にあるので、それ以外のアプローチを擁護、保護するのが、全体的な宗教理解のために有効であると思われた。

3. 研究の方法

「宗教と社会」領域、「宗教と他界」領域の双方で、典型的、あるいは類型的、少なくともサンプル的ないくつかの作業群に注目し、それぞれの関心や方法や視点の効能と制約を指摘し、とくに、優位なアプローチのもつ死角を、批判的に明らかにすることを試みた。

「宗教と他界」領域では、宗教心理学、死生学、現代宗教論、大衆文化論における流行語である「スピリチュアリティ」をキーワードにして、その整理と、さらにその整理の視点そのものの整理を試みた。またスピリチュアリティ論、死生学の中でも、死者の扱いにみられる基本的な偏りを、浮き彫りにすることを試みた。偏りを是正するために、19世紀後半以来の心霊研究を参照した。

個別の課題に関しては、つぎのとおりである。

まず、現代日本の医療や宗教的サブカルチャーの領域で流通している、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」という用語の再検討を行った。このような作業自体は、量的にも質的にも、むしろすでに多く見られるものだが、「社会」と「他界」を対比的にとら

える視点からは、「社会」的なスピリチュアリティへの偏りが見られる。また、一部の他界的なスピリチュアリティ論では、社会的な要素への配慮が欠落している。

その両者をバランスよく統合し、かつ、他界的なスピリチュアリティ論で見失われがちな、スピリチュアリズム的な意味、死者の死後生存に関する語義を浮き彫りにして、その位置付けをこころみた。

この延長線上で、近代スピリチュアリズム、心霊研究の再検討を行い、それを宗教多元主義(ジョン・ヒックその他)、死生学(フィリップ・アリエスその他)との接点に位置付けてみた。

「宗教と社会」領域では、「公共宗教」をキーワードとして、現代日本の死者祭祀、宗教教育、宗教弾圧、国際関係の中の終末論を見直してみた。これら社会的に扱われることが多いテーマを、他界的な側面を強調することで、社会的なアプローチの偏りが浮き彫りになることを期待した。

個別の課題に関しては、靖国問題と葬祭問題という、分離しがちな研究テーマを、死者祭祀というカテゴリーにとりまとめ、相互補完的に論じることで、それぞれ死角になりやすいテーマを、浮き彫りにすることを試みた。また、両者に共通する課題が明らかになることを期待した。具体的には、死者祭祀として両者を見比べることで、死者のリアリティの増減が、祭祀儀礼の形骸化その他の弊害を生むこと、などを確認することと目指した。

宗教と社会の関係で、最も政治社会的に重要なのは、国内的には宗教弾圧、宗教革命、国際的には宗教戦争であるが、それらを、他界的要素を配慮しつつ再検討し、政治社会的宗教への、他界的要素の介入を浮き彫りにすることを試みた。

これらの個別作業を通して、課題の最終的な目的である、社会的宗教と他界的宗教の統合的理解のための理論構築を、モデル的に試みた。

4. 研究成果

多面的なアプローチのためには、できるだけ多面的なビジョンを要所に組み込んでおくのが一つの工夫である。中期ケン・ウィルバーが強調する四象限図が、そのための効果的な仕掛けになることを指摘した。この四象限図に、さまざま宗教研究を、モデル的に単純化して配置すると、それぞれの射程と制限が、明らかになった。

このような研究成果の中間報告として、単著(『社会的宗教と他界的宗教のあいだ見え隠れする死者』、世界思想社、2011年)を刊行し、関連研究者に送付し、さまざまなコメントを得ることができた。

具体的な個別の成果は、下記のとおりである。

他界的宗教の領域において、「スピリチュアリティ」「スピリチュアル」の整理として、

神学的、実存的、エネルギー論的、非局在的な意味の他に、死後生存という意味でのスピリットを焦点として確立し、スピリチュアル・ケアや、大衆的宗教文化におけるその位置付けを明らかにした。このプロセスで、世界的宗教の犯しがちなアブユーズやハラシメント、犯罪行為に関して、問題点が浮き彫りになってきた。つぎなる課題である。

心霊研究、スピリチュアリズムの、宗教多元主義や、死生学への接続に関しては、ヒックやアリエスを読み直すことで、現代の古典といわれるこれらの作業において、心霊研究、スピリチュアリズムの投げかける重要な問題が、重要性にもかかわらず、学術的扱いの困難さから、未解決のまま放置され、そのまま黙殺されていることが、浮き彫りになった。学術研究として、怠慢な状況と言わざるを得ないので、さらなる再検討が今後の課題となる。

社会的宗教の領域において、以下のような成果を得た。

死者祭祀に関しては、靖国問題は外交問題化し、葬祭問題は市民社会で大きな関心事となっている、その問題の根がどこにあるか、確認した。要点は、死者のリアリティが希薄化し、人間中心、政治や社会中心の実践になることで、祭祀の意義が希薄となり、問題の所在すら忘却されているところにある。死者のリアリティを再検討、再確認することが、日本のみならず人類全体の倫理、実存の質的な向上、量的な増量のために、有益であるとの見通しを確認した。

宗教弾圧、宗教革命、宗教戦争に関しては、具体的な事例をモデル化してみることで、宗教的な価値基準、政治的な法、人道、自然法といった、さまざまな法・価値観・規範体系がせめぎ合っており、そこから、問題が錯綜していることが浮き彫りになった。

個別研究をまとめて、統合的な理論として、社会的宗教の構築される回路と、世界的宗教の影響が介入してくる回路と、この両方法を組み合わせたモデルを提案した。社会学から神学まで、あいだに諸心理学、諸哲学を組み込むモデルは、宗教の統合的理解のための1つの基礎として、試行することができる。

これらの成果を受けて、後半の2年では、社会的宗教から他界的宗教までを覆う、新たなテーマ設定を模索した。それは、諸宗教、諸スピリチュアリティが前提とする諸法（規範体系）があることから、それぞれの合法性を問い直すことである。これは、本課題を受けて継続的に行うべき作業として、つぎの課題となる。

なお、副産物として、市民が死生観を培うための参考となる、一般書を公刊した。『生前に書く「死去のご挨拶状」』（春秋社、2010年）は、常に「死を思う」ことで、死を迎える心構えを培うこと、それがよりよい生き方につながることを、わかりやすくまとめて、一般市民の利用に供した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 11 件)

津城寛文「社会的身心の拡張 危機への配慮」

『身心変容技法』3号、2014年、13～17頁、査読無

津城寛文「社会的身心の再考 ベルクソンの素人読みから」

『身心変容技法』2号、2013年、47～51頁、査読無

津城寛文「善い社会のビジョン ユートピア社会主義と近代スピリチュアリズムのあいだ」

『宗教学論集』32輯、駒沢宗教学研究会、2013年、1～23頁、査読有

津城寛文「宗教の実践と研究 いくつかの先行例を参照して」

『身心変容技法研究』1号、2012年、7～42頁、査読無

津城寛文「社会的宗教と他界的宗教をつなぐ ひとつの糸口としての死後生」

『宗教と倫理』10号、2010年、51～64頁、査読無

TSUSHIRO, Hirofumi, A Multi-Dimensional Understanding of Public Religion: with Special Reference to the Yasuuni Shrine, *Politics and Religion*, No.1/2010, vol-4, 2010, Belgrade, pp. 56-67. 査読無

津城寛文「宗教研究の射程確認 ひとつの糸口としてのケン・ウィルバー」

『筑波大学哲学・思想論集』35号、2010年、71～86頁、査読無

津城寛文「現代日本から見る終末論 人的シナリオと神的シナリオの間」

『駒沢大学宗教学論集』29輯、2010年、3～32頁、査読有

津城寛文「近代神道の鎮魂行法をめぐって スピリチュアルな意識と超心理学の間」

『超心理学研究』14巻、1・2号、2009年、5～10頁、査読無

〔学会発表〕(計 19 件)

津城寛文「宗教の評価記述 公益性、霊性、合法性」

2013年11月21日、駒沢大学総合教育部・文化学部門主催、駒沢宗教学研究會共催、公開講演会(第171回、宗教学研究會)(招待講演、駒沢大学会館246)

津城寛文「死者の幻影・再考 非常時が増幅する合法性の問題」

2013年10月12日、宗教倫理学会第14回学術大会(キャンパスプラザ京都、京都市)

津城寛文「死者(のため)に祈ること 合法と非合法のあいだ」

2013年9月10日、土井道子記念京都哲学基金主催平成25年度シンポジウム「願と希望」(京都ガーデンパレスホテル、京都市)

津城寛文「北一輝と霊的日蓮主義 合法と非合法のあいだ」

2013年9月8日、日本宗教学会第72回学術大会(国学院大学、渋谷区)

津城寛文「空想的社会主義と近代スピリチュアリズムのあいだ」

2012年9月9日、日本宗教学会代71回学術大会(皇学館大学、三重県伊勢市)

津城寛文「社会的身心の拡大と合法性について」

2012年5月31日、身心変容技法研究会(京都大学こころの未来研究センター、京都市左京区)

津城寛文「スピリチュアル・ヒーリングの五つの焦点的意味」

2011年10月22日、宗教倫理学会第12回学術大会(龍谷大学アヴァンティ響都ホール、京都市南区)

津城寛文「宗教教育の二方向 水平的多元主義と垂直的多元主義のあいだ」

2011年9月4日、日本宗教学会代70回学術大会(関西学院大学、兵庫県西宮市)

津城寛文「社会的宗教と世界的宗教をつなぐひとつの糸口としての死後生」

2010年10月2日、宗教倫理学会第11回学術大会(キャンパスプラザ京都、京都市)

TSUSHIRO, Hirofumi, Some Reflections on the 'Spiritual': Focusing on 'Healing'

28th August, 2010, California Institute For Human Science (Encinitas, CA. USA)

津城寛文「社会的宗教と世界的宗教への序章 ケン・ウィルバー論から」

2009年9月12日 68回宗教学会(京都大学:9月11～13日)

〔図書〕(計 5 件)

櫻尾直樹、本山一博編『人間に魂はあるか? 本山博の学問と実践』国書刊行会、2013年、全399頁(櫻尾直樹、本山一博、津城寛文、他7名。担当部分は、津城寛文「宗教(研究)の世界的側面と社会的側面 本山博の位置付け」55～79頁)

津城寛文『社会的宗教と世界的宗教のあいだ 見え隠れする死者』世界思想社、2011年、286頁

鶴岡賀雄、深澤英隆編『スピリチュアリティの宗教史 上巻(宗教史学論叢15巻)』リトン、2010年、全468頁(深澤英隆、葛西賢太、津城寛文、他13名。担当部分は、津城寛文「近代スピリチュアリズムと死後継続の問題 マイヤーズ事件をめぐる」179～200頁)

津城寛文『生前に書く「死去のご挨拶状」』春秋社、2010年、155頁

佐々木宏幹、藤井正雄、津城寛文監修『「霊」をどう説くか 現代仏教の「霊」をめぐる教化法』四季社、2010年、全351頁(佐々木宏幹、藤井正雄、津城寛文、他5名。担当部分は、津城寛文「「靈魂」を考える意味」262～293頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津城 寛文 (TSUSHIRO, Hirofumi)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 30212054